

渥美湾と渥美半島の明日を考える

市野 和夫

(元愛知大学教授・設楽ダムの建設中止を求める会代表)

はじめに

みなさん、こんにちは。いただいたテーマが大きすぎて、できる範囲の報告をさせていただきます。

私の方で、主に、自治体や水資源機構や国等公的な機関がまとめた資料では触れていないこと、この50~60年の開発によって環境が非常に傷んでいますので、そのあたりのことを申し上げたいと思います。



開発をすすめてきた我々の社会が、自分達がやってきた負の側面の位置づけができない、自分達ですまなかったとなかなか言えない雰囲気があって、それをきちんと我々は知っておかないと次の世代にまともな財産を残すことはできないと思います。そういう意味で少し、うるさがられ、嫌われていますが、環境面から問題を提起します。

伊良湖・渥美半島の特徴

伊良湖の気象を見てみますと、最寒月は1月ですが、最低気温が5℃を超えています。植物は5℃を下回ると成長が止まりますが、冬でも植物がゆっくりなんとか成長し続ける温暖な場所です。電照菊など施設栽培が全国に先駆けて始まった、地理的条件のよい場所です。一年の降水量は1600ミリくらい。農業をやるには少し少ない程度です。砂漠と比べればはるかに条件はよい。水がないというのは本当かとよく聞かれますが、努力すればもう少し節水はできます。日照時間は2000時間を超えています。

豊川用水は、ダム等に依拠して用水を引いている7割方が灌漑農業用水です。ダムと調整池が水源で、貯水容量が5182万トンです。設楽ダムは、豊川用水に水を供給するとされていますが、7300万トンの利水容量のうち、6000万トンが不特定目的で、一目で要らないダムだとわかります。

NPOの表浜ネットワークが、豊橋の海岸でウミガメの保護をしています。遠州灘では砂浜の浸食問題が起きています。海岸線、砂浜がどんどん減ってきている問題です。これは天竜川に佐久間ダムができて50年経ち、その影響が海岸まで及んでいるという事実です。川の事業が海まで影響するということが、表浜の現場で目に見えます。赤羽根漁港では、突堤を一つ作ったのが影響を与えました。環境影響を十分考慮しないで、これまでの社会ではごく普通に開発をしてきました。それを21世紀になって10年経った今、きっちり見直すことが必要です。

三河湾のデータ、あるいは外海の黒潮のデータも含めて、愛知県の水産試験場のデータがかなり詳しくウェブに出ています。見ていただければと思います。

伊良湖岬の鷹の渡り、明日の朝は天気が悪いと見られないかもしれませんが、9月から11月の初め、たくさん渡るときと少ないときがありますが、サンバ、ハチクマなど鳥が渡っていきます。最近インターネットで簡単にデータが読めます。

川と海

この地域は中部山岳に囲まれてそこから流れてくる川、木曾三川、矢作川、豊川、河川が作り上げた肥沃な沖積平野と豊かな内湾の恵みで発展してきた地域です。それを忘れて工業ばかり、お金のことばかり考えていると大事なことが消えてしまうと思われます。

三河港は、西浦半島と田原を結んだ東側、渥美湾の一番奥です。渥美湾は三河湾の東の部分で、西の部分を知多湾あるいは衣浦湾と呼んでいます。かなり広い海域が三河港です。渥美半島寄りが田原の埋め立て地で、一直線の海岸線は埋め立てでできています。渥美湾の奥に豊川が注いでいます。もともと浅い海で干潟や浅場が広がっているところに大きな港を造ったことで問題を生じさせています。豊川の一番上流、設楽町の田口地域にダムを造る事業が進んでいます。総貯水容量9,800万立米の大きなダムですが、その半分以上(6,000万立米)が川に流すための貯水容量です。

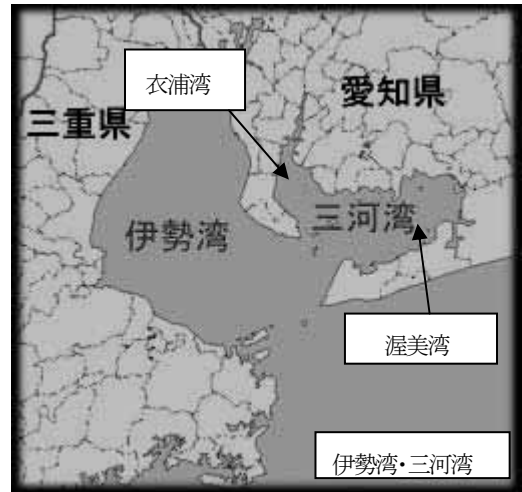
(次ページへ続く)

研究センターNEWS

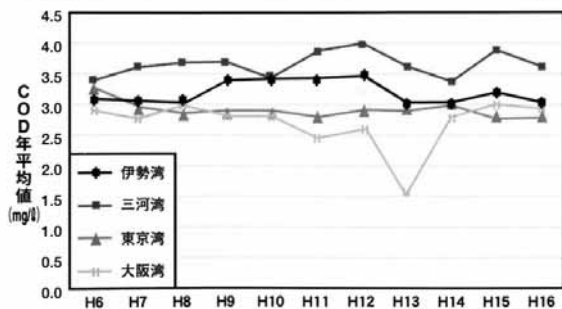
伊勢湾と三河湾の川と海の関係を見てみましょう。渥美湾は、流れ込む川の流量が少ないのが特徴です。衣浦湾は、小さい器に矢作川の水が入りますので、水の交換がよく起きますのですが、渥美湾の方は小さい豊川が大きな器に入るので、水の交換がたいへん悪いのです。木曾三川が流れ込む伊勢湾よりも三河湾の方が水の交換が遅いし、地形の上でも閉鎖的な渥美湾は特に遅いということです。平均の深度は10mを切り、三河湾は浅い湾だというのが特徴です。水の入替わりが悪いことと、浅いことで、かつての漁獲高は非常に大きく、よく魚が育つ海でしたが、それは言い換えると汚れやすい海だということです。

埋め立てと三河湾の水質

近年の三河湾と他の主な内湾、伊勢湾・三河湾・東京湾・大阪湾を比較すると、一番汚れがひどいのが三河湾です。COD（化学的酸素要求量）が大きいと酸欠の海になりやすいのですが、貧酸素になると魚介類は死に絶えます。汚濁されやすい海で、しかも現実には他の湾と比べて汚れやすい状態にあるのが三河湾、とりわけ渥美湾がそうです。赤潮は、高度成長期に栄養が流れ込んで増えたのですが、干潟や浅場を埋め立てたことも大きな要因です。三河港は主として70年代に埋め立てられました。これが三河港の汚濁を深刻にした最大要因です。蒲郡、大塚、御津、豊橋、田原と埋め立てがすすみ、大きな影響を及ぼすことになりました。埋め立てが進んでいくのと並行して赤潮は慢性化しました。赤潮は、プランクトンの異常発生で、海水の色が変わる現象です。プランクトンが死んで海底に沈むとヘドロがたまり、海水に溶ければCODの値は大きくなります。



三河湾の水質の経年の変化（COD年平均値）



三河湾では、COD年平均値は、全国の他水域と比較して高い濃度を示し、経年変化では、上昇傾向にあります。

田原湾の一番奥が汐川干潟として現在残っています。工業用地として計画通りに埋め立てできずに残った場所です。現在、埋立地にはトヨタはじめ大きな企業が入っていて、豊川河口の六条潟と汐川干潟が比較的まとまった浅場として残っていますが、他はほとんど浅いところなくなっています。大きな港を造る時、浚渫して掘っていますので港の航路、泊地は深くなっています。三河港全域はかなり砂がなくなっています。浚渫した土砂を埋め立て地に盛ったので、西浦から田原の内側の水域は深くなって、大型の船が停泊できる場所が広がっています。浅い海が広がっていた昔とは全く状態が変わり、全面

工業地域になってきています。1990年代、ラグーナという遊園地ができましたが、大事なところを埋め立てて、問題な使い方をしていると思います。

酸欠の海がアサリに及ぼす影響

埋め立てが進むとアサリが激減しました。豊橋市域のデータですが、埋め立てが始まる前は1万5千トンくらいの生産がありました。今は、愛知県全体の生産量が約1万トンです。六条潟では年間3千トンから4千トンのアサリの稚貝が獲れます。稚貝は、発生したときは目で見えない砂粒程度ですが、みるみる大きくなって10mmから20mmになります。その稚貝を三河湾各地のアサリ漁場にまいて1～2年かけて育てます。2年くらいすると4cmくらいになります。現在、アサリそのものは全国的に獲れるところは少なくなって、愛知が県別でいうと全国一の生産高です。東京近辺の流通を見ると、ほとんどが愛知、三河湾のアサリと表示されています。その大半は六条潟の稚貝が元になっています。六条潟はきれいな砂地の干潟なので、アサリの子どもが育つには良い環境です。豊川の恵みです。矢作川と比べると、目の粗い砂です。そのアサリが、現在毎年のように全滅しています。苦潮が原因です。

赤潮状態の海水にアサリを入れて15分くらいすると海水は濁った状態から透明に変わります。アサリがプランクトンを食べて海水を浄化する機能を担っています。海の浄化能力は、バクテリアや微生物も含めて、生き物が担っている部分が大いなのですが、生き物の棲みかをつぶしてきた埋め立ての影響で、海の浄化能力が失われています。海草のコアマモやアマモなどの藻場（海中草原）は、窒素やリンを吸収して海水をきれいにする働きがあります。海草が吸収して水中の栄養分が低下するので、赤潮の発生が抑えられます。1960年代までは、いたるところにアマモの群落が茂っていました。かつては海水浴でアマモに足をとられて溺れそうになるようなこともありましたが、埋め立て・浚渫の影響で激減しました。赤潮の慢性化、干潟や藻場（浅場）の激減、浚渫による深堀りで、夏の海底付近の酸素が全くなくなる状態が起き、貧酸素・酸欠水域が広が

りました。水産試験場のHPに観測データが載っています。ご覧になれば、今海の中がどんな状態か見られます。渥美湾の奥、全域が酸欠状態です。2005年、雨の少なかった年ですが、非常に浅いところまで酸欠になっています。伊勢湾の方は20mくらい深い部分で酸欠になりますが、三河湾は浅いところまで酸欠になるのが特徴で、この水が干潟まであがってくるとアサリも全然とれなくなります。酸欠水が海水の表面に上がってきたのが、青潮とか苦潮と呼ばれるものです。硫黄の細かい粉ですが、もとは海水中の硫酸イオンからくるものです。酸素がないところで、硫化水素に変わるので青白い海水になります。六条潟は東風が強く吹くと、深い方の海水が表面まで湧きあがってきて、干潟の向こうに青白く見えます。手前から沖へ強風が吹くと出ます。

以上が三河湾沿岸の工業開発、大型港湾の開発、浚渫や埋め立てが主な原因で生じた三河湾の汚濁です。夏の間、ほとんどが酸欠の水に海底が覆われるので、海底付近に生息する魚、カレイ、カニ、シャコなどが湾の奥ではほとんどいない領域が広がります。大半の魚介類が海底にいない状態です。高級魚が獲れなくなっています。プランクトンを食べて浮いている、ボラ、セイゴなどはいますが、高級魚が湾の奥ではいない状態です。夏の間はカニもいません。時期が悪いと、ハゼまで全滅し、秋のハゼ釣りができなくなります。瀕死の海になっています。

なんとかアサリの稚貝はがんばっている。その年生まれて育ったものを、他へ移します。六条潟のアサリは苦潮でときどき全滅します。あちこち残っている親から種が出て、流れてきて毎年六条潟で発生しますから、消えてしまうことはないのですが、とにかく瀕死の状態にあります。



（編集部注：六条潟は生き物の宝庫で、アサリの子も、稚貝がわき出るように次々と発生する奇跡の干潟である。ここでとれた稚貝は各地に放流され、アサリの漁獲量日本一の愛知県を支えている。）

川の水が減ると生態系にも影響が

渥美半島は1968年に完成した豊川用水によって、畑作が増えました。最初の計画では米を作るための灌漑用水だったのですが、米は余るようになったので畑作に使われるようになりました。キャベツ、ブロッコリーなど。豊川用水は1958年にダムが完成し10年かけて設備ができ、使われるようになりました。70年代、80年代、毎年のように水が足りなくなることが続きました。夏の畑作、日照りのときにキャベツにたくさん水が要するというのもあって、さらに豊川総合用水事業が実施され、5割増しの水源設備が2002年に完成しました。それが大島ダム、寒狭川導水、調整池です。



現在は、蒲郡から伊良湖まで含めて、あまり大きくない豊川から水を供給している仕組みが豊川用水です。東三河の水資源は豊川用水に依存していますが、豊川からたっぷり水を取ることで、豊川の水は減っています。豊川の流量が年間11億トンくらいあります。豊川用水ができてから新城石田を流れる量が2割くらい減っています。川の水の大部分は、雨が降った直後にダサーッと流れて後は少ないのですが、実際には普段の川の流量は半分くらいに減っている感じで、かなり影響が出ています。川の水が減ることが、渥美湾、三河湾にも影響があります。

渥美湾の一番奥に豊川が流れ込んでいますが、その水量が減ると渥美湾の海水を交換する仕組みがぐっと弱くなります。川の水によって、川の水の10倍～20倍程度の海水の流れ（密度流）という流れが湾内に起きるのですが、川の水が減るとそれが弱まります。もともと渥美湾は水の交換が悪い上に、豊川の水が減ることでさらに悪くなっています。これが酸欠の海、汚濁を促進しています。

雨が降った後の豊川の水の量をみてみると、豊川用水ができてからは、1日目、雨が降って水が増えて、この例では、流量36～37m³あったのが1日経つと10トンまで落ちます。用水ができる以前は徐々に減っています。この落差分が豊川用水に取り入れられているわけです。数日で数百万トンになります。そういう方式で、水が川から奪われています。それが海まで影響します。寒狭川頭首工・導水路は総合用水事業で2000年ごろにできた施設ですが、従来水が取られていなかった寒狭川からも豊川用水に水を取るようになり、川へも影響があります。ダムや堰ができると、その下流では砂利がほとんどなくなって、賽の河原のようになってしまいます。ダム・堰がない現在の寒狭川上流は、玉石や細かい砂利がたくさんある豊かな川です。こういう川でないとアユは育ちません。ネコギギが住んでいるのもこういう川です。

（編集部注：ネコギギは、生息数や生息域の減少から1977年に種指定の国の天然記念物に指定され、1991年には環境省のレッドデータブック「絶滅危惧IB類」に選定された魚。伊勢湾・三河湾に注ぐ河川に分布している。ギギという魚の仲間でもマズ型のずんぐりとした体型で体色は黄褐色、全体に暗褐色の斑点がある。）

設楽ダムは本当に必要か

豊川用水は、支流の宇連川が開発されましたが、現在は一部、寒狭川からも水を取っています。たいへん多くの水を豊川から取水するようになりました。宇連川では、上流のダムで砂利の供給が断たれ、以前に宇連川の河原を形成していた砂利は流下して大野の頭首工のダム湖の湖尻に堆積しています。ほとんど砂利の流れない川になっています。それを見るだけで川にどれだけ影響があるかわかります。近年では寒狭川上流を除いて豊川のアユの友釣りはできなくなっています。ダムの影響が大きいということです。

そのとどめをさすような計画が設楽ダムです。設楽ダムを造って水を貯めるということは、雨の多い夏季に貯水して、冬季の渇水期に流すということになるので、三河湾にも大いに影響があります。川から水が入って海水交換が促進されれば貧酸

素は改善されますが、設楽ダムは逆に夏の河川水を減らすのです。環境を壊す、やっではない事業です。

実際に豊川総合用水事業が完成し、運用されて以降は今年も含めて取水制限はなくなりました。2005年は、観測史上最少雨量の特別な年ですが、この年だけ取水制限がありました。このとき以外は、水は十分あるという実績が出ています。これ以上水を使う方向ではなく、今まででも取りすぎているので、水の消費量を減らし、川に水を戻し、海を蘇らせていく方向をとらないといけないと思います。今までのやり方を続けていると、次の世代がたいへんな目にあいます。負債だけ残すこととなります。

設楽ダムは、実際に水源としての本当の目的はなく不特定目的のダムであり、市民常識からみて不要なものです。裁判所はなかなか常識的な判断をしてくれませんが・・・。

最後に、東三河、渥美半島の農業が豊川用水に依存しているので、そのことも含めて、奥三河の水源地帯のこと、水だけではなく、奥三河の人たちの生活が維持できていくことを含めて三河湾の周辺で生活している我々の生活をどうするかということをおわせて考えていくこと、今までのやり方に加えて、新しい工夫をすることが必要だと考えています。みなさんと一緒に、どういう方向がいいのか考えていきたいと思っています。
(編集:伊藤小友美)

第7回三河地域懇談会レポート



第7回三河地域懇談会を「渥美半島に学ぶ」と題して、10月2日(土)、田原文化会館で開催しました。愛知・岐阜・三重、東海3県から57名の参加がありました。基調講演は、巻頭、ご紹介しました市野和夫先生にお願いしました。



三河地域では、毎年、地域を回る形で、会員の交流と学びの場を作ってきました。豊橋、蒲郡、安城、岡崎と回を重ね、去年は新城、奥三河で山のくらしをテーマに開催しましたが、「今年は海へ行こう」と、実行委員の熱い思いを寄せ合い、研究者や活動している地元の方々のご協力を得て、準備を重ねてきました。

基調講演の後、お昼をはさんで4つの分科会で、それぞれのテーマを深めました。報告者の方々には、日頃の仕事や活動をご紹介いただき、伝えたいことや悩みなどもお話しいただきました。

4つの分科会 一覧

環境の分科会より

大羽先生より、「温暖な気候、豊かな自然に恵まれた渥美半島ですが、その環境は開発と共に変化しています。かつて、松尾芭蕉が『鷹一つつけてうれしいらご崎』と詠んだのは1687年のことですが、今も、岬にはバードウォッチングのマニア達がカメラを抱えて集います。その鳥の渡りにも、変化が見られ、1万5千羽渡っていたものが、今は8千〜1万羽に減っています。シデコブシの自生地もあり、これだけ豊かな自然があると、次々に問題も起こります。渥美の縦貫道、ゴルフ場の開発、大山での自衛隊の訓練、中部空港の埋め立てのために渥美の山を壊すなど、猛禽類の繁殖に影響があるということで渡りや繁殖の調査を行っています自衛隊も鳥を調査して配慮した訓練ということになっています。渥美の表浜では、アカウミガメも、子どもの頃はいっぱいいました。騒ぐようになったのは、少なくなつてからです。愛知県の天然記念物としてハマボウの群生地もあります。」とのお話があり、参加者からは質問も出され、環境についてみんなで考える機会となりました。

平和の分科会より

安間先生より、「1901年、伊良湖試射場建設が着工、1905年に伊良湖岬村住民は全戸移転を強いられました。(伊良湖に縁のある柳田国男は「願はしきは平和なり」と記しています。)以降、富国強兵のための国策として、伊良湖の軍事拠点化はますますすすむことになりました。監的場などの戦争遺跡が数多く残っています。伊良湖灯台は試射の障害にならないように波打ち際に作られました(1929年)。他にはない戦争遺跡といえるのではないのでしょうか。」とのお話がありました。

参加者からは、「当時の軍の力の強さが分かった。平和活動は学んだことを継承していくことが大切だが、同時にその伝えかたを学ぶ(工夫する)ことも必要だと思っている。」「自分の住んでいる町に戦跡があることをはじめて知った。地元のことをもっと知る必要があると感じた。」などの声が出されました。

農業の分科会より

渥美産直センターの本多さんより、「田原市の平成18年度農業産出額及び生産農業所得は、田原市全体で724億あり、その内の約半分の354億円を“花き”(施設園芸)が占め、野菜182億円・畜産合計で167億円となっています。1989年に農民運動全国連合会が結成され、1990年には新婦人中央で農民連と提携した全国的な産直運動に取り組む事を提起しました。1994年に渥美産直センターを法人化し、2001年にみかわ市民生協との取り引きを開始しました。センター事業を取り組んできた教訓として、『運動が事業を切り開く』を実感しています。」とのお話がありました。

参加者からは「元々渥美の農業政策は、単品政策でした。しかしこれだけで、これからの農家を目指す若者がいるかどうか。これからの渥美農業のモデルを新しく作っていく必要があると思います。」「自分の隣の人も専業農家で菊のみを作っ

テーマ	報告者
環境	市野和夫先生 大羽康利先生(渥美自然の会)
平和	安間慎先生(豊橋空襲を語り継ぐ会)
農業	本多正一さん(渥美産直センター)
酪農	川澄宏匡さん(中央製乳(株)社長) 白井宏昌さん(JA愛知みなみ畜産部肉牛酪農課課長) 伊藤和昭さん・河合重昭さん 内柴孝昇さん(酪農生産者)

いました。本来“百姓”とは『百の仕事がある』尊い人達だったと思う。新しい品種の花を造っても、2年～3年したら中国から同じ品種の花が出回っています。この様な現状では専門農家も大変だと思います。」などの意見が出されました。

酪農の分科会より

みかわ市民生協創立当初より、お取引のある中央製乳社長から、提携の歴史をうかがいました。成分調整牛乳が当たり前だったころに無調整の牛乳を取り扱ったこと、添加物や香料を抑えたホームアイスの開発、牛乳を飲む・食べよう運動などの取り組みや、しっかり品質管理をして生協牛乳を作っていたことがわかりました。酪農の現状としては、酪農家も、飼養頭数も、生産量も年々落ちていること、猛暑の影響でかなりの牛が廃牛になっているという生産者の話もあり、参加からは、「生協の若い組合員に生協牛乳のよさや、みなさんのご苦勞を伝えたい」という意見が出されました。

懇談会のオプション企画として、国民休暇村で宿泊し渥美半島を周るフィールドワークを企画しましたところ、36名ものご参加がありました。渥美の環境・平和・歴史・文化に学び、それぞれがたくさんの気づきと思いを地域に持って帰ることができました。ご参加いただいたみなさん、ご協力いただいた渥美のみなさんに心より感謝を申し上げます。（文責：伊藤小友美）

寄稿 充実のフィールドワークを振り返って

椰子の実、岬の灯台……。7回目の「三河地域懇談会」は、旅ごころさう渥美半島の田原市で開かれた。しかも、長引く猛暑との「おわかれ」にふさわしい秋、10月初旬の企画だ。その上、渥美半島をまるごと学びつくすというオプション付の企画である。場所よし、時季よし、準備よしと思うものの、何か忘れていないかと不安に思うのが実行委員だ。そんな私たちも、参加された皆さんから“多くの学びとたくさんのお出会い、ありがとう”という声をいただき、この共通のひとこと（感想）が2日間の懇談会とフィールドワークの結果を物語っているのだと、安堵の胸をなでおろした。以下は、実行委員の一人である私のミニ見聞記である。



八木 憲一郎
（コープあいち副理事長）

多くの気づきと学びを頭にいっぱい詰め込んで、フィールドワークがスタートした。蔵王山の展望台に立って見下ろす三河湾は、夕日を映して静かだ。遠くに知多半島を臨み、足元のトヨタ工場の向こうに干潟が広がる。午前中に聞いたアサリの稚貝の話がリアルさを増してよみがえってくる。事実をもとに学び、学んだことを事実によってより確かなものにしていくという営みの大切さを実感したフィールドワークの始まりである。

その夜の「宿舎」では、いくつかのグループで夜遅くまで語りあった。夕食のバーベキューでは、いつもと異なる光景が展開され、楽しかった。準備から薪に火をつけるころまで、老若男女、すべての参加者が協力しあい、そして乾杯。鉄板や網の上には、肉や野菜がところ狭しと並ぶ。この頃から、焼き具合を見ながら取り皿に盛る人、デーと構えてもつばら食する人、という不思議な分担が生まれる。家で夕食では椅子から絶対動かない（と十分想像できる）人が甲斐甲斐しく動きまわっている。時には食事の仕度から解放されてもいいと自分に言い聞かせながら紙コップを傾ける人がいれば、いつものように男女共同参画を実践する人もいる。そうかと思えば、何かしなくてはとウロウロしているだけの私プラス若干名。そんな、色々な人たちが、自分の人生模様を背中ににじませながら、野外パーティーの時は過ぎていく。どのグループも、肉・野菜・魚介・キノコ、それに手作り焼きおにぎりなどおいしくいただいた。最後の焼きそばのでき具合がグループによって違っていたため少し心残りの人もいたようだが、気持ちもおなかも心地よく満たされた。

フィールドワークは2日目が本番。早朝、サシバの渡りを観察に行くという一大イベントに備えて、夕食後に学習会が開かれた。朝、語りつかれて寝過ごしてしまった人をロッジに残して、伊良湖岬の恋路が浜へ。あいにくの曇り空だったが、三重の半島めざして飛び立つサシバの群れが見られたという。この浜辺の駐車場は、全国から集まる「渡り鳥追っかけウォッチャー」のワゴン車と望遠カメラの列に占拠されているのだが、周辺の土産物屋さんや焼き大アサリ屋さんは「この期間は商売あがったりだ」と不満顔だった。

手製の豪華な朝食でしっかり腹ごしらえをして戦跡めぐりに出かけた。「地域と協同の研究センター」の観光では、地域の文化や歴史が実感できるコースが欠かせない。そこでは戦跡めぐりも重要なポイントだ。100年前には試射の砲弾が飛んでいたという、その真下の道をドライブしながら、伊良湖村の強制移住のことなど教えていただいた。ひと味違う、感慨深い平和学習会だった。「常に事実を調べ、そこから物事を見ていくことの大切さを知り、知っているのと胸に落ちるのとは違うということもよく分かった」という感想をいただいたが、同感だ。環境・平和・農業問題など、前の日に学習したことを翌日現場（事実）で見て体験して、深く知る。そんなフィールドワークって、とても贅沢な企画なんだなあ、今更ながら感心したのだ。

天気予報に反して、好天に恵まれた2日間だった。東海3県の地域と協同を考える皆さんの協同と団結で、天気までも味方につけることができた三河地域懇談会だった。人と人のつながりを大切にしてきたみかわ市民生協の36年間の取り組みが、生協という組織の枠を超えて、人と人のつながり、くらしと地域を守る協同と連帯のネットワークへと発展してきたように思う。いや、そういった地域の人と人のつながりが、みかわ市民生協の組織と運動、そして事業を育ててくれたのだ。見学途中の田戸神社でいただいた「まあい小石」をポケットの中で回しながら、密度の濃かった2日間を思い出し、参加した皆さん、事務局としてご苦勞された皆さんに感謝している。



研究フォーラム「生協職員の仕事を考える」第3回研究集会

「生協で働くことって何？」

8月29日(日)、金山のワークライフプラザれあろ6階大会議室に於いて、研究フォーラム「生協職員の仕事を考える」第3回研究集会を30人の参加で開催しました。

1. ゲストのお二人紹介

<藤沢浩(ふじさわ ひろし)さん(生活協同組合コープぎふ 西濃北支所地域担当)>

藤沢さんは、1977年3月に岐阜大学生協入協し、1982年に岐阜地区市民生協(現コープぎふ)に移籍、共同購入地域担当を1年半経験したのち本部に異動、その後東海コープに出向(桑名物流センターに7年間)、岐阜に戻り、西濃地区本部、仲間づくりタスクを経て2005年より多治見支所、各務原支所、西濃北支所で地域担当をされている58歳の職員さんです。

<近藤修平さん(生活協同組合コープあいち 海部センター地域担当)>

近藤さんは、工場での仕事や、電気関係の在庫管理の仕事などを経験する中で、「人と関わる仕事がしたい！」とホームページの募集広告を見て生協に就職し、2年8カ月、28歳の職員さんです。なんととっても生協はコミュニケーションをとる仕事。「あなたがおすすめてくれるから共済も入るわ！」とのことばが、一番うれしいといわれる職員さんです。

2. お二人へのインタビューから

インタビュアー: 東海コープ 田中良成さん

田中: これまでは東海以外の生協の方に、話を聞いてきましたが、今回は、お二人とも、同じ東海コープ内の生協の方です最初は藤沢さんからお聞きします。藤沢さんは、いろいろな仕事をされてきました。岐阜大学生協から、今のコープぎふ(当時、岐阜地区市民生協)へ入られました。生協って、どんなふうに若いころは感じていたか、見ていたか、お聞かせください。

藤沢: コープぎふの藤沢です。今日はたくさんみなさまにお集まりいただきましてありがとうございます。では、今の質問にお答えしたいと思います。私は1977年に岐阜大学生協に入りました。当時、まだ私は大学に在籍をしておりまして、授業にもあまり満足に出席しない学生でした。そうした中で、大学生協に知り合いがいて、「働いてみないか」と誘われたのがきっかけです。大学に入ってすぐに、大学生協に加入し、組合員として利用していましたが、それは生協というものを十分に理解してということではなく、私が入った時は、大学の入学手続きの一環としてお金を支払ったような記憶があります。ただ利用する中で、なんとなく「普通のお店と違う」というように、皮膚感覚としては感じていました。大学にいる時、今のコープぎふの前身の一つ、当時の誕生間



コープぎふ 藤沢さん

もない岐阜地区市民生協で働いている知り合いもいましたので、その知り合いから状況を聞いて、すごく組合員ががんばっているなということは情報とは感じていました。

岐阜大学生協から岐阜市民生協に移籍し、その時一番実感したのは、組合員さんのパワーです。当時5・6人、最低でも5人というグループで共同購入をやっていましたが、5・6人あるいは10人近い組合員が、配達トラックが着くと同時に集まりました。そこで、わいわい、がやがや、本当にいろんな生活の情報交換ですとか商品の話とかを、いっぱいしていました。そして、最初に入った年に、原爆に関する8ミリフィルムの上映会を、地域でやっていました。夜、組合員の家を会場にして「上映会をやるから来てくれ」ということで、機材を持って行った覚えがあります。そういったパワーを毎日の配達の中で、非常に強く感じたというのが私の若いころの印象です。

田中: 近藤さんに自己紹介を兼ねてご質問をさせていただきます。近藤さんの紹介にもあるように、さまざまな職業を経験されたということですが、どうして仕事を転々と変えられたのでしょうか。

近藤: 大学を中退してまして、大学に入った時も、やりたいことが見つからず、流れのままに入り、大学に行けば、「やりたいことが見つかるだろう」という人任せでした。そんなことは簡単に見つかる訳ではなく、自分で探さないと見つからないというのは今になって思います。結局、大学も続かず辞めてしまって、仕事を探しましたが、紙面上での給料の良さですとか、こうい



コープあいち 近藤さん

仕事だったらできそうだからやってみようとか、簡単に考えてしまって、仕事の中身はあまり考えなかったような気がします。それが工場での仕事です。やってみて、仕事というのはそんな簡単にやって、簡単にお金がもらえるものではないということです。それに、自分が本当にやりたくてやっているという思いで入った会社ではないので、どこか嫌になると、すぐ投げ出してしまふようなころがあって、ああでもない、こうでもないというふうな考え方が転々としていました。

田中:生協は続きそうですか？

近藤:はい、生協に入ったのは、人と関わる仕事がしたいというふうに思っています。実は、今もそうですが、人づき合いはそんなに得意ではありません。電気関係の在庫管理の仕事を経験する中でも、人と関わる仕事がしたいということで、営業希望で入りました。でも、その会社では、営業より人が足りないのと、在庫管理の仕事をやりました。しかし、希望はずっと通らなさそうだったので、人生長く続いた時に後悔するかなと思い、転職を決めました。そして今の生協に入っていますので、生協がある限りは続けさせてもらえれば、ありがたいなと思います。

田中:そこでお聞きしたいのは、これまでに経験した仕事と、生協に入って、ここなら続けていけると感じたところの違いを教えてください。



東海コープ事業連合 田中さん

近藤:生協での仕事というのは、生協の存在は知っていて、人との関わり合いが強い仕事というイメージは持っていました。しかし、それ以上に、共同購入の配達をさせてもらうようになって、他の企業・仕事と違うなと思ったところは、お客さんではないということです。組合員さんに僕らが協力するという、荷下ろし場の雰囲気を見て、こんな仕事は生協だけなんだろうなと思い、ちょっと衝撃を受けました。僕がこれをやりましょうかと言うと、ここまでがあなたたちの仕事で、ここからは私たちの仕事だからと、お客さんではなく、逆に組合員さんに、生協の仕組みを教えてくださいました。そういう、ただの職員、会社員とお客さんという関係ではないということが、すごく新鮮に思えました。

田中:前回研究集会に来ていただきました、ならコープの須賀澤さんも、外で仕事を経験され、生協にパートで入られた方でした。ご本人的にいうなら、生協は、なんて「ぬるま湯」という感覚を受けたということでしたが、近藤さんはそういう感覚はなかったですか。

近藤:そうですね。確かに、他の勤めてきた会社と比べたら、ちょっと違うと思います。「ぬるま湯」というか、人によって、やる・やらないの差があり、同じサービスが提供できていないのではないかなと思う時があります。やらなくてもいい仕事もたくさんありますが、やったら喜んでくれるということがあります。やることであれば、組合員の満足も変わってくると思えるような、それが人と人のつながりだったりします。機械的にやっても、文句は言われませんが、それがルールであれば、それはそれでいいのかもしれませんが、職員一人ひとりのモチベーションということでは、全然違います。その辺が違うのではないかなと思います。

田中:藤沢さんは、何か思うことはありますか。

藤沢:生協は「ぬるま湯」と言われても、私は民間を知らないので評価はできません。まだ、人を大切にしようという、そういう気持ちがある中で、生協の中にあるので、組合員に対して、組合員を大切にしようという思いで接していると思いますし、職員についても働く人を大切にしようというのは、気持ちの上であると思います。ただ、それが悪い方に作用しますと、例えば目標達成できなくても、なあなあで過ぎていってしまい、それがひょっとして「ぬるま湯」という見方に、なっていると思います。近藤さんが言われるように、人によって違うというのも、岐阜の私の職場でも感じる事です。たしかに、自分が働いている職場の中でもかなり目標に対する温度差というのがあるとよく感じています。

田中:それはどこに原因があると思いますか。それは体質なのか、制度の問題なのか、それとも方針も問題なのか、マネジメントの問題なのか、そういうことではどういうふうに感じていますか。

藤沢:今の質問に対して、的確な解答はできません。ただ、自分自身も含めて、目標をなにがなんでもやるというのは、今いる職場に限っていえば少し弱いと思います。必ずしも目標に対して、きちんとやらなくても過ぎていきます。そういう職場の風土は、その職場の管理者のマネジメントの問題もあると思いますし、いわゆる職場風土という今のメンバーだけでなく、5年前、10年前からつくられてきたものもあるのかなと思います。

《以下報告集につづく》

2010年11月末に、この研究集会の報告集を発行予定です。報告集を希望される場合は研究センターまでお申し込みください。

文責:大島三津夫

特別報告会 報告「都市農業と環境」 野田輝己さん

9月29日(水)食と農パネル世話人会主催で、野田輝己さん(研究センター理事・食と農パネル世話人)の特別報告会を開催しました。

野田輝己さんは、名古屋市で野田農場を営んでおられます。名古屋市認定農業者・愛知県知事認定エコファーマーで、専業農家です。大都会名古屋の郊外、守山区中志段味で、お米、トマトを中心に、多くの作物を作っておられます。「志段味」と書いて「しだみ」と読みます。江戸時代から続く農家です。農場での直売、農場からの直送、朝市をはじめ、学校や各団体の田植え体験、芋掘り体験、ワラジつくり、注連縄つくりなど、いろいろな活動もされています。

報告会は、土地区画整理事業区域内に位置する名古屋市中志段味地区の野田農場の事例から、都市農業の持続可能性について、13名の参加者で考え合う趣旨で開催しました。名古屋市・土地区画整理組合・野田農場の3者で進められた協議の結果を詳しくお聞きしました。名古屋市内で農業を続けたい野田さんが、立ち退きを迫られて、たくさんの方の協力を得て訴訟を起こし、和解に至った報告です。以下、報告会の概要を掲載致します。

10月から名古屋でCOP10が行われる中で、開発が進められる中で都市農業の存続は難しいという話をします。

野田農場のある名古屋市守山区中志段味では住民施工(地主が集まって、行政の指導を受ける)の区画整理が行われており、農場はその中にすっぽりはまっている。区画整理において農地は、農業を引き続きやっていく地域と宅地化する地域に区分けされ、多くの農地が宅地化される。

事の発端は板東英二が来たことから始まる。「そこが知りたい特捜!板東リサーチ」の庄内川取材である。

庄内川の水を使って農業している農家と紹介された。「クロガネモチノキが埋め立てでなくなる」という話をしたら、「えらいこっちゃ。」となり、応援してもらった。

「区画整理」と農業、自然、歴史、文化、伝統などの勉強もした。この志段味は、たいへん古い歴史を持ち、多くの自然も残る貴重な地域だということを再認識した。そして神社や、森を残し、人とのつながり、自然とのつながり、水のつながりも大切にしたいと思った。

区画整理組合は、区画整理の中心施設として、ユニーの複合型大型店舗を誘致した。その建設予定地内に農場は隣接している。

裁判では、整理組合が農地の減歩率(区画整理組合に提供する土地の率)を54%としたことに対し

て、裁判長は、「専業農家として営農するには負担が多すぎる」という見解を示した。そして、市長が変わったこともあって、和解の方向で話し合いがすすんだ。その結果、減歩率25%まで下げることと、和解に至った。

結果として野田農場は残り、絶滅危惧種であるイチョウウキゴケやカヤネズミなども残せるようになった。運動のシンボルであったクロガネモチの木は、名古屋市が農業公園として残す約束をした。

区画整理内でも、工場の敷地は除外される場合が多い。しかし、農地は除外が難しい。農業で生活している農家は弱い立場で、和解にはこぎつけたが、いまだ複雑な心境である。米価が下がっていることも気がかりだ。

野田農場の存続は、近隣市の農地を守ることもつながっている。そして、環境を守ることもつながっている。ダム機能も持つ農地を大切に、今後も米やトマトを作っていく。



野田農場に棲息する絶滅危惧種
イチョウウキゴケ

(文責:伊藤小友美)

INDEX

渥美湾と渥美半島の明日を考える (三河地域懇談会基調講演)	市野和夫	1-4
第7回三河地域懇談会レポート		4-5
寄稿 充実のフィールドワークを振り返って	八木憲一郎	5
研究フォーラム「生協職員の仕事を考える」第3回研究集会 「生協で働くことって何？」		6-7
特別報告会「都市農業と環境」		8

2010年10月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 川崎直己

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>